

ふるさとの歴史・文化の再発見と創造を考える

ふるさと「風」

第十二号（二〇〇七年五月）

世界遺産めぐり

兼平ちえこ

価値があるから残すのだろうか、あるがままの自然を保全するから価値が生まれるのだろうか、そんなことをつくづくと考えさせられた旅でした。

成田空港から十時間二十五分、モスクワ経由、更に約三時間。そこはトルコ。

東西に伸びた国土は、西にエーゲ海、南は地中海、北は黒海と三方を海に囲まれた雄大な自然と豊かな文化、そして荘厳な歴史遺産を誇る国。日本の約二倍の面積でありながら国の人口は約半分の七千万人。

三三〇年、コンスタンティヌス大帝が東ローマから遷都したビザンチン帝国。一四五三年オスマン一世が衰微のビザンチン帝国を滅ぼし、十六世紀に最盛を誇ったオスマン帝国。この二大帝国の都として、悠久の昔から続くトルコの大地。ボスポラス海峡を隔て、ヨーロッパサイドとアジアサイドにまたがる大都市イスタンブールから、アジアサイドへ全行程二〇〇〇キロのバスの旅。

流暢な日本語のトルコ人ガイド。碧いあこがれのエーゲ海、牧草と草原の続く大地には満開

にした白の洋梨の花が、土に確りと根を下した太い幹に守られて、点在して見える。広い大地に高くあるのは、その洋梨の木だけ。

草原の奥に連なっている小高い山も、柔らかな緑の線に包まれて、優しい孤を描いているだけの風景。その穏やかなうねりの所々にオレンジ色の屋根と白い壁の民家が三、四十軒、礼拝堂のミナレット（突塔）と寄り添っている。遮るものがないから隣りの街がお見通しになっている。ふと思ってしまった。

「この広大な土地を耕すのは誰なのでしょう」と。

トルコは八十四年前に民主国家となり、広大な土地は個人の所有地だという。広大な土地は風土によって牧草、麦畑、オリーブ、さくらんぼ、りんごといった風に作付けされている。

各家々で目に付いたのが無花果（いちじく）の木。日本の柿ノ木のような感じに家々の庭に植えられてあった。無花果の実の熟れるころには、友人知人を招き我家の自慢の無花果の実でこしらえた手作りの菓子を褒め、語らうのだそうだ。日本でもつい何十年か前までは、我家に実った甘柿や出来上がった干し柿をご近所などにお裾分けなどをしたものでしたが、今はそんな日常

はなくなってしまう。しかし、ここには昔からの暮らしの良き習慣が文化として残って生きている、と気付かせてもらった。

草原を走ること六時間余り。紀元前三千年から二千五百年の遺構が顔を覗かせているローマ時代の浴場や音楽堂が目を引くトロイの遺跡に到着。第二のアテネと称された都ベルガマの小さい丘にあるアクロポリス遺跡。そこから見下ろした街にも城壁が共存しながらとけこんでいる。

地中海最大級の遺跡エフェソス遺跡は、紀元十世紀頃から栄えた古代都市。二世紀に落成された二万四千五百人収容の円形劇場はこの時代にして圧巻。

世界遺産に登録されたパムッカレの石灰棚、小高い山の周囲三分の二ほどが白い見事な田畑になっている頂上に広がる保養地としてのヒエラポリス遺跡。

翌日は、パムッカレからコンヤ、そして中部地方のカツパドキアに向う。この辺りから車窓の風景が一変してくる。石灰質のような灰色の大地。山は岩山に。筑波山に似た山や雪をかぶった富士山（三千二百七十メートル）を発見。山あいの農村地帯にはさくらんぼの木が植えられていた。

東西南北約百キロのほぼ中心にある最大級の景勝地カツパドキア。三百万年前の火山噴火によって誕生した地には、キノコや尖塔の形をした奇岩が立ち並び、幻想的な風景が広がる。火山灰と溶岩が堆積して出来た岩山は容易に掘る

ことができるため、迫害を逃れて隠れ住んだキリスト教徒の洞窟修道院の謎深き地下都市。現役の洞窟ハウスやホテル、レストラン。直下の谷から続く白い岩々の群。幻想的な自然に驚き、圧倒される。その風景はいまも頭の中に映し出される。

カッパドキアからアンカラへ。アンカラからアンカラエキスプレスでイスタンブールに入る。モザイクで彩られたギリシャ正教の総本山アヤソフィア。

鮮やかなタイルに覆われたブルーモスク。オスマン帝国の栄華を物語る君主の居城、トプカプ宮殿。豪華絢爛な装飾品に往時の権力の強大さを知ることが出来ました。

今回のトルコの旅で思い知らされたのは、紀元前からの遺跡、古代の遺跡、中世の姿が人々の暮らしの中に、自然なものとして生きているということでした。

私たちはともすると価値があるから保存しようと考えてしまいます。でも、歴史、文化の価値というのは時の流れの中に洗われながらも、暮らしの中の自然な一部分として大切にされてくることによって生まれてくるのだらうということでした。

そして改めて自分のふるさとを考えた時、悠久の時を経て姿を現してくれた鹿の子遺跡、宮平遺跡を何故、再び蓋をしてみたのだらうかということでした。それを思った途端「伝承の一つ忘れて、暮らしの一つ沈む」という言葉を思い出し、その重さを感じました。

椿

伊東弓子

人間は、一人として同じ人間はいない。草木や花も同じだらう。地球上の生物には一つとして同じものはなく、それぞれに個性をもっている。

娘のところに行く道沿いに椿の木がある。いつも朝に見ているせいか、単の赤が美しく心に届いてくる。最近、目にした椿の花の中では一番だと思つた。

子供のころ、ぬり絵遊びでは全部塗りつぶすのが上手だとされていて、塗りつぶすのに力が入ったものだった。中でも椿の花を塗りつぶすのが好きだった。山椿を手折ってきて、赤・黄・緑を食い入るように見つめ、力を込めて塗りつぶしていった。赤い花びら、黄色いめしべ、緑の葉っぱ。単純な塗り方であったが、そのときの三つの色の調和のとれた鮮やかさは今も心象残像として、裡に残っている。今に思つと、終戦直後でもありクレヨンも良かつたとは思えないのだが、力が入っていたせいもあるのだらう、塗りやすかつたように思う。これはどうも美化して心象残像を思つてしまつ年齢というもの悪戯なのだらう。

三月、石岡のひな祭り展をみて歩いた。姪が黒地に赤い椿の刺繍のある財布を求めていた。とても気に入っている様子がわかつた。椿は誰にも好かれる花なのかと思つた。

妹が定年後、日本画を始めた。それは、若い

頃からの願いがやっと叶つた喜びの出発だった。その最初に描いたのは赤い単の椿だった。どんな思いがあつて赤い単の椿を描いたのか聞き忘れたが、額に咲いた一輪は春風の中に咲いていることを感じさせてくれた。この花は絵になるのだ、と改めて思わせてくれた。

娘の頃だった。思う人にあげようと思つて求めたこけしがあつた。こけしの纏つた着物の柄は赤い椿だった。こけしはとうとうあげずじまいだった。今も何処かに眠っているはずだ。

母がつけていた髪油は椿油だった。いつも良い香りがした。独特のピンにラベルの図柄は黄色い油に浮き上がって見えた。それを今、私もつけている。大島に咲く椿は日本列島の昔のままの種類なのかなと思つてみる。その椿たちに逢つてみたい、行つてみたいと思つが、思いだけで終わってしまった。

幼い頃の母の歌声が思われる。

父の読経の声が木魚の長閑な音色とリズムとともに、

お山のお山の 山寺に山寺に

白い椿が 咲いたとき咲いたとき

ポクポク木魚 打つたびに打つたびに

白い椿が 散つたとき散つたとき

と境内に遊んでいた私の耳に、いつも届いていた。

高校の頃であつた。広い竹藪に一本白い花をつける細い椿の木があつた。竹藪を歩くたびに、竹の根に囲まれて可哀そうなこと、と思ひ、本堂の近くに植え替えることにした。そのとき母

は、

「そこで咲いているからいいのよ。人が勝手に動かしてもその木は喜ばないよ」

と言った。大丈夫だよ、と言って植え替えたのだったが枯れてしまった。今もあの白い椿にはすまないことをしたと思っている。そんな所為もあるのだろうか、白い椿は抱きしめたいほど好きな花だ。

今年、玉椿をみた。うす桃色の優しいまんまるい蕾。白雲荘の芝生に唇ご飯を食べている時にみつけた。陽だまりでぽっつと眺めていたら突然、

「ゆみちゃん！」

と、隣りのたっちゃんの声が聞こえた。勿論、空耳だ。隣に住む友達で、お互い妹や弟を連れてよく遊んだ。たっちゃんのを陽だまりに思ったら急にあの頃の遊びが蘇ってきた。蕾を一つとって、花びらになる一枚一枚をひっくり返していく。口に舐め舐めダルマを作っていく。あの時は競争だった。長い、丸い、沢山作ること。

もうあの木も家もない。引越していったのだ。

草木や花でよく遊んだ日々が思い出される。

椿坂という所がある。しゅくのトクさんという人がこの坂を登って嫁に来た。今も手入れが行き届き、U字型をした道は椿やいろいろの木々が茂っている。やわらかい土の道。雨の日は水が走り、風の日は土ほこりや木の葉が舞つ。

冬は霜柱や氷で冷たい。夏は蚊も襲ってくる。

しかし、涼しい木陰も作ってくれる。

しかし、トクさんはもう居ない。

人に思いがあるように草木や花にも夫々の思いがある。そのおもいに私は勇気付けられ、そして癒される。

夜空の星に

小林幸枝

星に願いを

でも、あなたは何万年先から来たのですか

いま私に瞬いてくれているあなたに

私の願いを言っても

私の声が届くのは何万年先になるのですか

私の声があなたに届いた時は

私という肉体もなければ

肉体を形成していた分子たちも原子たちも

もうここにはいません

どこへ行ったのかも知ることはできません

何の存在もないわ

星に願いを

あなたに願いを言ったら

本当に叶えてくださるのですか

私は、わたしの願いを声にしてしまったら

待つことも

耐えることも出来なくなってしまいますのよ

本当に叶えてくださるのなら

いま勇気を出して言いますわよ

でも、わたしが私の願いを声にしてしまったら

本当に待つことも

耐えることも出来なくなってしまいますのよ

星に願いを

あなたはそんなに私の願いを聞きたいのですか

私に想いを言わせたいのですか

私の想いを聞いて

哀れな地球の女よ

なんて独りごとは嫌ですわよ

あなたの哀れみの眩きを

もしも私の魂なんてものが漂っていて

聞いてしまったら

あなたはどう責任を取ってくださいるのですか

あなたは何もお返事を下さらないのですね

それなのに私に

星に願いをと仰るのですね

私は、わたしの願いを声にしてしまったら

待つことも

耐えることも出来なくなってしまいますのよ

本当ですよ

叶えてくださるのならば

私、勇気を出して言いますけれど

私は、わたしの願いを声にしてしまったら

待つことも

耐えることも出来なくなってしまいますのよ

あらためておもう

白井啓治

月一回発行の、「この小さな「ふるさと表現紙」もようやく十二号を迎えた。ちょうど一年である。紙名も会報から「ふるさとルネサンス」そして「ふるさと・風」と目まぐるしく変更してきたが、この「ふるさと・風」ということで落ち着きそうである。

二〇〇四年四月、町興しのためのビジネスモデルとして「ふるさとルネサンス」が企画され、六月よりふるさとルネサンス塾がスタートし、第一期三年間の約束で塾の講師を引き受け、指導などと大げさなものではないがやってきた。第二期には、新たな指導者の基にスタートされる事になるうかとおもう。

「ふるさと・風」の会は、第一期の受講生の方たちが中心となって「ふるさと表現紙」としてスタートしたのであるが、前号から「ふるさと・風」と名称を改めたのを機に、ふるさとを表現していくという想いのある方々の参加を求めていく事となった。色々な方の参加を期待するものである。

ふるさとルネサンス塾、第一期の講師を終えた今、このふるさと表現紙の確かな継続を願い、ルネサンス塾開講時の思いをちょっと振り返ってみたいと思う。以下の文は、開講時に受講生の皆さんに渡したものである。

x x x

今なぜ「ふるさとルネサンス」なのか

ふるさと文化とは、その風土固有の生活形成

の様式と内容である。こんな風な言い方をするといかにも教養深そうに聞えるかもしれないが、揚げ足を取られまいとする役所的な言い方で、分ったようではさっぱり分らない定義になつてしまします。

ふるさと文化をもつと平たく考えてみると「その風土に生活する知恵」ということができます。一つの文化には一つの暮らしがあり、一つの暮らしのあるところ一つの生産があります。少し理屈っぽい言い回しになりますが、暮らしがなければ文化はないし、生産がなければ暮らしは成り立ちません。当全のことですが生産がなければ文化はありません。つまり、文化がなければ生産はないし暮らしもないということができません。

ふるさとに一つの文化が消えたということは、一つの生産がなくなり、一つの暮らしがなくなつたということになります。生活が一つなくなつてしまつのです。何故なら、生活する知恵を一つ失つたからです。

ふるさと文化にはいろいろな側面がありますが、それらの一つ一つにはそれぞれ伝説とか云われ等があり、それらは伝承という形で受け継がれることによつて日常生活の知恵となつて活かされ暮らしを支えてきました。

ふるさとにはそれぞれ特徴的な産業が発展してきましたが、その裏を見るとその産業にまつわる伝説や民話とも言える逸話・云われが必ず伝承されてあるものです。そしてそれは、その土地の人たちの間に確りと認知されて口にの

ぼります。しかし、不思議なことにその産業の衰退にあわせて認知されていた伝説や民話の人々の口にはぼらなくなり忘れられていきます。そして、その伝説や民話がすっかり忘れられたときには、その産業もなくなつてしまします。

ここにふるさと文化をルネサンスし、ふるさとの活性化を考えた人材育成のための塾が開かれることになり、その第一段階として「民話ルネサンス講座」をスタートさせることになりました。

この講座は、ふるさと文化の一つである民話というところに視点を置いて、伝承を創造していく市民作家の育成を目指しています。

一つの文化を伝承していくためには、単純に埋もれた文化を掘り起こしていただくだけでは駄目で、そこに受け継いでいこう、伝えていかなければという将来に対する必然性を持たせることが必要です。

必然性という言葉が嫌なら有用性とか必要性と言つても良いし、理由といたつても構いません。いずれにせよ将来にとって無意味なものであれば、伝えたり、受け継いだりされることはありません。

市民作家として伝承を創造するということとは、掘り起こした文化（この講座では民話ということになります）に対して、伝えるに値するものがあるかを検証すると同時に、磨り減つたり、時代的に不都合がきたりしている部分に対して、新たな価値を再構築して与えるということなのです。新たな価値を再構築して与えない

限り、受け継ぐ側に、受け継ぐべき必然性が認められなくなってしまう。

今何故、ふるさと文化のルネサンスが必要なのかを考えたとき、その答えは伝承ということの意義を考えてみると納得できます。伝承の意義というのは、受け継ぐに値する価値だとか理由ということの中身になるわけですが、その中身とは、個人的な考え方ではありませんが「未来の思い出」という風に捉え、考えています。未来の思い出とは、未来への道標だとか未来への一里塚と理解していただければよいだろうと思います。

伝承が途絶えたというのは、伝承の意義である未来の思い出（未来への道標、一里塚）としての役割がなくなっただからだといえます。それは文化としての火が一つ消えたということになります。先に述べたように、文化の火が一つ消えたということはその地域での生活が一つ消えたということにも繋がります。そして、大袈裟に言えば生産が一つなくなっただともいえます。多くの伝承文化がなくなるといことは多くの生産がなくなるといことですから、多くの生活がなくなるといことを意味します。

これはかなりこじつけの説といえますが、「古里」と書くふるさととは十世代にわたって口伝するもののある里のこと、という人がいます。しかし、この説はあながち笑えない説であると思います。

民話というのはふるさと文化の一つの側面ですが、伝承されてきた民話がなくなってしまう

ったというのは、そこにはもう生活のための生産がなくなっただことを意味し、生活する場所ではないと言つてことができます。これは決して大袈裟な考えではないといえましょう。

伝承するふるさと文化が一つなくなるといふのは、ふるさととしての役割が一つ無くなったということになり、歴史が一つ無くなったということになります。

歴史の町石岡に来て最初に耳にした言葉が、歴史では飯が喰えん、でした。歴史というのは生活することによって文化として紡がれていくものですから、歴史では喰えんというのは実におかしな理屈です。歴史を紡ぐことを忘れて、歴史では飯が喰えんとは何事かと思つたものでした。

民話をルネサンスするということは、昔を思い起こす、昔の文化に今一度光を与えるということではなく、自分たちの生活の場であるふるさとに生活できる生産を持つことであると理解して、受講者の皆さんには確かな市民作家活動の展開を願っております。

少し手直ししたい所もあるが、その時の原文をそのまま紹介してみた。

この三年間に、文章・絵・肉体パフォーマンスの各分野に、一人、二人ではあるが確実な人材の育ってきたことに個人的には大層満足している。あとは、このふるさと表現紙、「風」の長く続いてくれることを願って止まない。

石岡市柴間ギター文化館発 ことば座「常世の国恋物語百」第二回公演

第三話「奴賀比売物語」 第四話「風貴（龍に恋したまほろばの里娘）」

2007年5月20日（日曜日）13：30開場 14：00開演（前売2500円 当日3000円）

第三話「奴賀比売物語」...旧八郷地区は片岡村に伝わる「奴賀比古・奴賀比売の伝説話を基に、龍神山異聞として朗読舞劇用に再構築した「奴賀比売物語」古代常世の国の風を想って小林幸枝が朗読に舞います。
第四話「風貴（龍に恋したまほろばの里娘）」...峰寺山西光院の回廊から見下ろした、まほろばの里の風景をモチーフに、天保の大飢饉を時代背景にして書き下ろした、まほろばの里娘の恋物語。常陸の国の天保の凶荒は、龍の涙の所為であったという、新しいふるさと伝説。

前売チケットはギター文化館（0299-46-2457）石岡市中町商店街カフェ・キーパー（0299-23-1100）

で。

普通の健康な人間は何もせず三十分も居れば退屈すると思う。テレビの国会中継を見ると質問者と答弁する閣僚など以外はやたらと発言もできないようだし多くの議員はアクビを堪えて黙って座っているしかないようだ。法案の審議を尽くす」といつても、双方一方的な主張で、周りが退屈しているようでは本当の「審議」にはならない。野党の主張を政府がかわし最後には与党の幹部で決められたとおり反対意見は否決されて終る。議会制民主主義では議員の数が少なければ、逆立ちしても意見が通る見込みは無いのだから与党にならなければ居ないも同然に思えてならない。野党を支持する国民も多く選挙によっては反対票のほつが多いのに当選者以外の意見は少数として無視される。

与党議員でも党の決定に反すれば、刺客に付き纏われ命は取られないまでも、除名などの処分を受けて苦汁を飲まされる。勝者側の論理に立った素晴らしい？制度である。実態はどつであれ民主主義といわれる現代でも独裁政治に近いことが可能なのだから、封建時代にはそれこそ時の流れを良く見極めて行動しないとウダツは上がらないし何よりも生きてゆけないことになる。戦国の世の武將たちは生き残るためにさぞかし苦勞をしたことと思う。

戦国時代の末期、石岡では連綿と続く桓武平氏の源流を継承する名門の大掾氏が豊臣秀吉党の全国統一法案に賛成しなかったため、与党に追従する刺客の佐竹義宣に攻められて滅亡した。天正十八年（1590）十二月二十三日のことである。城主の大掾清幹（だいじょうきよもと）と浄幹とも書く）は今で言えは未だ高校三年生、冬休み直前の学校を早退して敵を防ぐため、千二百騎の軍勢を率い二十二日には泉町通りを駆け抜け石塚街道（県道52号）を進んだ。

園部川を越えた辺りで佐竹の軍勢に遭遇したが敵の先鋒隊長は徳川家康さえも一目置いたと言われる猛将・車丹波守忠次である。忽ちドツと鬨（とき）の声を上げて弓、鉄砲を雨霰と射掛けてくる。大掾勢も林の中や窪地などに身を隠して応戦した。射撃戦が続いた頃、車丹波守が辛抱しきれず「誰か敵陣に乗り入れよ！」と大声で叫び、持っていた軍扇を振りかざした。佐竹の軍勢は嫌でも飛び出さなければならず、大掾勢の一角に突入してきた。

あまりにも急なため大掾の陣は忽ち突き崩されてしまったが、大將の清幹少年は側近の武士と共に逆に敵陣へ斬り込んで五、六十人を倒した。暫く戦って気がつくと、清幹の周りには敵兵ばかりで味方が居なくなってしまう。赤い夕日が校舎を染めて、「いくら元気な高校三年生でも一人では危ない。敵陣を突き破ってようやく府中城まで退いてきた。

明けて二十三日、小美玉市西北部の戦場から脱出してきた軍勢を立て直して、大掾清幹は府

中城の守りを固めた。日本三名古城と言われた堅固な城で城内には二つの井戸と多数の池があつて水には困らない。当座の食糧もある。ここで堪えて鹿島、行方に点在する大掾系の武將たちに応援を要請する予定だったが、府中城を取り巻いた佐竹勢は城壁と断崖が重なる部分を避けて、城が町屋に向いた北部に火を放った。折からの風に煽られて城門は焼け落ち、煙と共に敵勢は府中城になだれ込んできた。市内柿岡街道から石岡市立中央図書館へ左折する丁字路信号の辺りが破られたことになる。

石岡小学校裏の城中山に「鈴が池伝説」が残っているが鈴が池は天守閣近くにあった「瓢箪池」である。「鈴姫と片目の魚」の話から鈴が池と呼ばれるようになったらしい。伝説そのものは茨城県北にも「石岡城」があり、同じく佐竹に攻め滅ぼされた片目の武將がいたらしく、その話が誤って府中（石岡）に伝わったものらしい。伝説は文字通り伝わるものだから、似たような話が何処に有っても良いのだが、問題はそれを大切に伝えていくかどうかである。残念ながら府中城の鈴が池跡地は、現在、完全にビル解体廃棄物捨場になっている。大掾清幹も府中（石岡）の領民が、そこまでするとは思わなかったであろう。

府中城主と呼ぶには若すぎた大掾清幹は焼け落ちる城を後にして抜け穴を伝い現在の北向観音近くに脱出、目の前には平国香など祖先の墓に手を合わせてから自刃して果てた。天正十八年十二月二十三日の昼近い頃と推測される。

享年十八歳、補佐し助言し庇護してくれる有能な家臣も無く、落城する前には多くの者が城主を見捨てて城から逃げ去ったと伝えられる。

「栄枯盛衰は世のならい」とは言うが、天正十八年は関が原合戦の十年前で戦国時代も終りに近い。織田信長が築いた地盤を豊臣秀吉が継承したニューズは石岡にも伝わっていた筈で、現代で言えば某保守政党の単独支配に移りつつある時代の流れが読めた頃である。それなのに、なぜ大掾氏は反対票を投じて潰されたのであろうか。尤も野心家の佐竹氏が石岡を狙っていたのだが…。

天正十七年五月、豊臣秀吉は金銀参拾五萬五千兩という大金を高級官僚やら有力武将に分け与えた。今でいう与党の選挙資金である。これによって選挙の行方は決まり関東、東北の有力武将たちは競って投票を予約した。その中には常陸国の佐竹氏、結城氏の名前がある。ブツブツ文句を言いながら言う事を聞かない態度を示したのが仙台の伊達政宗と小田原の北条氏政であった。狡猾な伊達政宗は周辺の武将たちに「投票するな！」と呼びかけておいて、自分だけ投票所の裏口から行ってコッソリと秀吉に投票したような手段で辛うじて生き残り、最後までソツポを向いていた北条氏政に対しては、秀吉が十七万の大軍を率いて討伐することを決意した。天正十八年三月一日、秀吉は後陽成天皇に拜謁して北条氏討伐遠征の報告をした。これで秀吉に服従しない者は賊となり、征伐されても仕方が無いという勝者の論理が確定したのである。

その頃、大掾氏は小田氏の影響を受けていたと推定される。石岡の名譽のためには言いたくないのだが、元龜元年(1570)、大掾清幹の父親である貞国は筑波山麓の小田勢に攻め込まれ府中城から玉里の砦に退いて…つまり、城を失っている。小田氏は、大掾氏の祖先・多氣大掾(たけのだいじょう)平義幹を騙して没落に追い込んだ常陸国の守護職・八田知家の子孫だから旧来の宿敵である。源頼朝の命令で大掾本流を継いだ馬場系(水戸)大掾氏とも南北朝時代から抗争を繰り返していたが遂に府中城まで奪われてしまった。翌年、小田氏治は堂々と石岡にやってきて府中城に入り周辺の砦などを攻撃した。

大掾貞国は親戚一族の出城や砦を転々としながら府中城へ戻る日を夢見て「艱難辛苦、臥薪嘗胆」の日々を過ごしていたのである。天正年代に入ると、皮肉なことに遠方の敵だった佐竹氏が、柿岡地区にいた太田道灌の子孫・太田三楽父子に小田攻めを任せ、勇将・上杉謙信の親友で豊臣秀吉も注目していたほどの智将・太田三楽はしばしば小田氏を攻めて土浦城に追い込みこれを滅亡させた。一旦は石岡を占拠した氏治も、最後は部下が身代わりになってくれて敵の追及を晦まし、妹の縁を頼って結城に逃れ越前で余生を送った。

後世に八郷町と石岡市が合併することを知っていた?太田三楽は、小田氏が退いた府中城には目もくれなかつたようで、十三歳にして家督を継いだ大掾清幹は府中城に戻れることが出

来た。後に攻め込んでくる佐竹氏も当面は水戸城の江戸氏を敵としており、一時的だが府中城は真空状態にあつて再び大掾氏の居城になったらしいが、小田氏が終始、小田原の北条氏と同盟を結んでいたようなので府中城「小田」北条と思われたか、或いは小田と共に大掾も滅びたと見られたか、豊臣秀吉が小田原攻めに際して諸大名に発した出頭命令は府中城に届かなかつたような気がする。もしかすると、放浪生活を送っていて世間の情報に疎く、重臣たちが折込広告と一緒にして廃品回収に出したのでは?。

北条を滅ぼした後の領地は家康に与えて三河、遠江など徳川氏ゆかりの国は接収するつもりで秀吉にとつては関東などどうでも良いので、常陸国は早々と尻尾を振ってきた佐竹に任せることにした。佐竹の当主は老獪な義重である。跡取り子の義宣に命じて府中城を攻めさせたのである。

大和朝廷が権力を握つてから、齋明天皇の四年(658)に阿部比羅夫が蝦夷征伐に東へ向かつて以来、壬申の乱、石岡の町が焼かれた天慶の乱、平忠常の乱、前九年の役、後三年の役、保元・平治の乱、源平合戦、承久の変、南北朝の抗争から応仁の乱まで、外国の刀伊賊(といぞく)襲来、元寇(げんこう)の役などを除いてもやたらと戦争が起こっている。大部分は権力の争奪であるから今の政治と同じで正義、非正義は付け難く多数決の勝ちである。

応仁の乱からは名実共に「戦国時代」になり武田信玄のように「侵掠すること火の如し」な

どと正々堂々と掠奪を宣言して行動する武士の時代になった。

大化の改新前に日本は百四十四の国に分かれていたが、それぞれ国造(くにのみやつこ)が治めていて中央では臣(おみ)、連(むらじ)、伴造(とものみやつこ)などの官職があった。

推古天皇の時代からは中国の官制を採用して左右の大臣、博士、八省百官とよばれる中央官僚が出来て、地方は国司、郡司が治めるようになる。文武天皇時代(701)に制定された大宝律令では、役所の管轄を規定し、皇族や官僚の等級を決めて、それが今に伝わっている。

武士の時代になって、石岡出身の平氏が天下を手中にしたのだが都暮しが続き先祖返りして公家の真似をしたから、東国に地盤を持つていた源氏に負けた。源頼朝は負かした平氏を手本にして京の都を離れ鎌倉に本拠を置き、従来の行政機構は棚上げして將軍、つまり自分中心の制度を整備しかけたのだが、猜疑心が強くて身内を信用出来ず、政子夫人とその一族に天下を取られた。北条氏は桓武平氏と称している。そうなる石岡出身の豪族ということになる。

大まかには「日本を動かした平氏、北条氏、さらには織田信長(自称)も石岡から出た」とことになるのである。平安時代から鎌倉時代にかけて「常陸国分寺、尼寺が置かれた常陸国府の町は日本一、賑やかな町だった」と、ある時代小説に書いてあったがまんざら嘘でもない。平將門が攻めて来た時に現在の石岡小学校辺りにあったという庁舎には、税金として集めて都へ

送るための絹織物が山と積まれていた。絹は当時の貨幣と同じで勿論、一般の民衆が簡単に買えるものでもない。將門軍の兵士は招集された農民だから、絹の山を目前にして理性など吹き飛んで強盗に早代わりしたのであろう。將門軍は農民一揆のようなものとする説もあり、或いは「国府には絹が山ほどある」と見込んで攻めて来たのかも知れない。石岡から天下取りが出てても不思議ではないのである。

それにつけても、天下分け目の「関が原合戦」を待たずに大塚氏が滅んだことは歴史的に惜しいことである。

大阪夏の陣が終って豊臣家が消えてから府中(石岡)の領主となった皆川山城守広照は、一万騎以上の軍勢を率いて北条方に付き、小田原城の一方を固めていた武將だった。秀吉の軍勢が困むのを見て「これは負ける」と直感して直ちに敵陣にメールを送り降伏を表明してきた。秀吉は「降参の時期が誠に早い」と妙なところで感心し「彼は年賀状や書中見舞いなどを呉れたことがあった」として敵対の罪を免除されている。広照は喜び勇んで部下百名余りで小田原城から脱出して秀吉陣営に加わった。

皆川氏は、かつて「関東八家」として室町幕府にも重用された長沼一族で代々、下野大塚を務めた名門である。同じ大塚氏でも常陸大塚より一つ格下なのだが、世渡りは上手だったようで、豊臣氏の衰亡を見越して徳川氏に接近し、家康の七男・松平忠輝の守り役として七万五千石の大名にして貰った。尤も石岡には一万石で

封ぜられたので、これは主君・松平忠輝が乱行に走った責任で滅封された後だった。

「裏切り」と言つと聞こえは悪いが「武士の転職」だと思えば主君を変えることも簡単にできるらしく、かの関が原合戦でも「裏切り」が勝敗を決しているようである。ただし「一度は砂をかけて」も簡単に許して貰える場合と徹底的に干される場合があることが、近代の政治でも明らかになったようだから、世の中を渡り歩くには気を付けたほうが良い。その差は何なのであろうか。

日本中の武將たちが東西に分かれて戦つたのが関が原の合戦であるから勝ち組は褒美を貰えて、負け組は命を落とし領地を没収されるのは仕方がないこととは思つが、九州の雄・島津氏の場合などは西軍(敗者)に属して藩主の義弘が家康の本陣に攻撃をかけながら、何のお咎めも受けずに六十万石余の薩摩藩を存続させている。それどころか、二六〇年の後には徳川幕府を倒す原動力として動き、明治維新を実現させたのである。

薩摩藩と共に倒幕の中心となつた毛利氏などは関が原合戦当時の藩主・輝元が大阪城に居たとはいえ、名目上は西軍の総大将格なのである。一族の武將も数人が西軍に加わつて家康に敵対している。それでも広島島百二十万石から秋三十六万九千石に減らされたが輝元自身は罰せられなかった。そして毛利家では家康を逆恨みし、毎年正月には歴代の藩主と数名の重臣だけが天守閣の一室に籠つて「関が原の仇を討つ」

ことを密かに誓っていたと伝えられる。面従腹背(めんじゆふく)はい、表面だけの従属(しも)も、相手に覚られなければ生存の手段なのである。島津も毛利も徳川より由緒を持つ武将には違いない。

西軍を牛耳っていたのは石田三成であるが関が原出陣の総大将は備前岡山に居た五十七万四千石の大大名で中納言の官職を持つ宇喜多秀家になっている。秀家は一万の兵力で陣を布いていたが、有名な小早川秀秋(秀吉夫人の甥)の東軍内通で打撃を受けた。怒って小早川陣営に突入しようとしたのだが重臣に止められて戦場を離脱。敵に追われながら主従三人で伊吹山の麓から現在の国定公園辺りを数ヶ月さまよって土地の郷土に助けられた。この時に怪しむ里人に秀家が持っていた名刀を渡して黙認させ、郷土から小判を与えられて薩摩の島津氏を頼って落ち延びた。黄金色の小判を見ても、秀家は使い道が分らなかったというから流石に大大名である。

宇喜多秀家に頼られた島津氏の場合、西軍に属してはいたが、どうも関が原合戦が起こる前の段階で、徳川家康の命を受けて伏見城を守っていた鳥居元忠の軍勢と一寸した手違いから小競り合いを起こしてしまっただけ。結果的に家康に敵対したことになるので、仕方なく西軍に加わったものの、作戦会議で自分が提案した「奇襲戦」に石田三成やその腹心が反対したので面白くない。戦鬪が始まっても動くことしなかつた。

当主の義弘が千五百の兵を率いて西軍総大将・宇喜多秀家軍の近くに陣を置いていたが最初から戦う気持がなない。自分が主張した「夜襲」案が採用されなかつたことへの不満もあるが、東軍の先陣として攻めて来るであろう親友の黒田長政、細川忠興、福島正則らとは顔を会わせたくなかつたのである。そこへ西軍を牛耳る石田三成の使者が来て不遜な態度で「早く合戦を始めるように」イエローカードをちらつかせながら督促したから島津軍は完全に固まってしまった。何事にも偉そうな態度をする役人は気を付けたほうが良い。

そのうちに戦況が一変した。裏切りと言うと嫌らしいから言い換えると西軍から東軍へ転職予定だった小早川秀秋が、家康に嚇かされ(鉄砲二十丁で陣中に撃ち込まれ)やっとな寝惚けた狸のように松尾山から下りてきた。その軍勢八千と鉄砲六百丁が、味方から敵に回ったのだから西軍の痛手は大きい。他にも四、五名の小大名が秀秋の動きを見てから転職を決めたのだが同じ行動をとっても領地を没収された者と許された者とがあり、その基準がよく分らない。平成の御世に起こった「郵政民営化の乱」でも捨てられた者と救われた者、それぞれ差があるよ。うだから面白い。現代政治は関が原時代と同じなのか？

小早川軍などの裏切りで最初に被害を受けたのは大谷刑部(ぎょうぶ)吉継の部隊である。正面の敵以外、急に左右に敵が出来たのだから防ぎようがない。総崩れになった影響で、松平

忠吉(家康の三男)、井伊直政、福島正則らの軍勢と戦っていた宇喜多軍にも動揺が見られるようになった。それでも島津は動かない。それどころか、逃亡して来る兵士が島津陣営に入り込まないように鉄砲隊で周りを囲んでしまった。「薄情者！」と言われたらしいが戦場である。

そのうちに慶長十五年(1600)九月十五日の昼過ぎになると西軍でまともなのは島津義弘の部隊ぐらいいなくなってしまった。最初に攻め込んできたのが徳川四天王の一人、本多平八郎忠勝である。豊臣秀頼が忠勝の武勇を褒めて呉れた名馬に跨って戦っていたが、馬のほうに先に戦死してしまったので徒歩で戦っていたところを家臣が自分の馬を差し上げた。その後から宇喜多軍を蹴散らした井伊直政が忠吉を助けながら攻めてきた。忠吉の奥方は直政の娘であるから、やはり四天王の直政は、自分が戦うよりも主君であり娘婿でもある忠吉に手柄を立てさせようと苦心していた。

血気に逸る忠吉は、直政の心配を他所に暴れ回っている。島津義弘は困った。親友とは戦いたく無いし、何より家康の息子を戦死させるようなことになれば後々の復讐問題にも影響する。そのうちに義弘の家来で豪の者が忠弘と斬り合いをはじめた。本来なら自分の家来が勝つように願うのだが、ここは双方、怪我の無いように祈るしかない。忠吉は左の肘(ひじ)を少し斬られたが、その時に井伊の家臣数名が忠吉を救援して義弘の家臣は討たれた。

少し話を逸らす関が原合戦の後に松平忠吉

は水戸二十万石の城主になる。この人は二代將軍・秀忠の弟で、天目山に滅んだ武田氏の名跡を継いで武田忠吉ともいう。優れた武将だったらしいが、若くして病没してしまった。佐竹氏が秋田へ飛ばされた後の水戸は、家康が四天王の一人・榊原康政に与えようとしたのだが、康政が固辞して受けなかったため家康は康政を館林へ十萬石で封じた。もし康政が水戸に来ていたら、水戸は代々、徳川の重臣が城主になったと思われる。忠吉が来たことで水戸は徳川一門の領地として確定してしまっただろう。後に徳川御三家の水戸藩が出来て、江戸時代には別格の藩になったが、明治維新の混乱を思うと、なまじ親藩でなかったほうが、と思わないでもない。間接的には石岡の歴史にも影響を及ぼしたことになる。

榊原康政はなぜ水戸を断ったのか？家康は関が原合戦の功労第一として水戸を与えようとしたのである。しかし康政は井伊直政や本多忠勝らのように合戦に加わっていない。合戦の前に康政は家康の後継者で二代將軍となる秀忠に付いていた。石田三成の動きに不審なものがあるとの情報を得た家康は八月六日に江戸城で対策を立て、秀忠には、三成と通じている会津の上杉景勝を牽制するため三万八千の軍勢を与え、康政を付けて宇都宮まで進ませ、そこから中仙道及び木曾路経由で関が原に向かわせた。

榊井沢を過ぎて信州路に入ると上田城周辺には真田一族がいて西軍に心を寄せている。一般には抵抗を仄めかす上田を攻めるのに手間取っ

て関が原合戦に間に合わなかったと言われているが、それ以外にも天候不良などで河止めを遭ったり、軍資金が不足したり、東海道を歩く家康軍との連絡が食い違ったりと、多くの要素が重なって秀忠軍は合戦に遅れたらしい。勝敗は時の運、兵力を外様大名に頼っていた家康は秀忠軍の遅れを心底から怒り、秀忠に会おうともしなかった。この時に家康に対して敢然と申し立てをして秀忠を庇い、事の理非を述べて釈明したのが榊原康政だった。

「…かかる折に世子と定められたる秀忠殿を疎外されれば、折角（合戦に）同意したる外様の諸侯は徳川家の行方に何と申うであらうか…」

この言葉には流石の家康も返す言葉が無かった。秀忠への怒りを諭してくれた康政を家康は「このたびの合戦の功労第一」として水戸を与えようとしたのであり、忠義のためとは言えず主君に意見をした康政は受けなかったのである。話を関が原に戻すと、裏切り部隊も攻め寄せてきて島津義弘の軍は壊滅状態に陥った。一旦、丘の上に避難した義弘は豪胆にも飯を喰いながら戦況を見て、「後は山で越え難い。前に見えるのが家康殿の本陣らしい。我が兵は百人ほどのようだが、死ぬ覚悟でそこへ突入してみよう…」と言った。生き残った重臣がこれを止めて、残った総員で敵陣を突破して関が原を脱出することにした。

派手な旗や馬印やら無駄なものや重い装備も捨てて身軽になり、一気に戦場を駆け抜けた。

これを見て東軍の福島正則、本多忠勝、井伊直政らをはじめ小早川の軍勢までが追いかけてきた。島津軍は見る見る減って義弘以下八十騎ほどが戦場離脱に成功したのである。この時に義弘の後継者で甥の豊久は負傷して逃れられないと自決し、重臣の一人が義弘と名乗って討たれている。また追撃した井伊直政も意識を失うほどの重傷を負っている。

関が原戦における奇跡の帰還は島津家と言うより薩摩全体の悲壮かつ勇壮な出来事として鹿児島県民に認識されているようで、昭和三十五年に文部省へ出張した県の教育委員長らが岐阜県の関が原町を訪れ、当時を物語る記録を確認した。さらに360年前に薩摩隼人が実行した敵中突破、戦場からの離脱を再現したいというので「関が原戦場踏破隊」を編成したという。

関が原から鹿児島まで、島津義弘主従が走破した240キロの道程を七日間で歩く行事は何年も続けられたようである。県民性にもよるだろうが関が原合戦をついに昨日のこと、しかも祖先の行動を自分たちのこととして捉える、可否は別として、名城の跡も定かではない常陸府中（石岡）の現状と比較して深く考えさせられる。

薩摩に戻った島津義弘は直ちに家康に恭順の意を表して家督を忠恒に譲り自分は隠棲することを表明した。不思議なことに、家康からは何の咎め立てもなく所領の薩摩六十万五千石が嫡子・忠恒に安堵されたのである。それどころか、忠恒に家康の名一字が与えられて家久と改名することになった。関が原では攻め込まれて最後

に家康軍と戦ったが、最初から合戦に加わらなかつたことが良かったかも知れないし、お互い刃を交えたが武將同士の武勇を認め合った井伊直政らの進言があつたものと思われる。そして、堂々と戦陣の正面を突破して故国まで帰りついた薩摩武士の豪胆さが評価されたのではないだろうか。

一方、懐に小判を持ちながら使い方も知らず、各地を逃げ回つていた宇喜多秀家はようやく薩摩に辿り着いた。しかし島津氏は既に家康に恭順を示していて匿つては貰えない。まして西軍総大将で最初から戦つた秀家が許される確立はゼロに近い。石田三成のように処刑されても仕方が無い。頼られた島津義弘は「窮鳥懐に入れば獵師も是を殺さず」という諺を思いだして凶々しいのは承知で井伊直政らを通じて家康に宇喜多秀家の助命を嘆願した。

宇喜多秀家は、徳川家康、前田利家、上杉景勝、毛利輝元と秀吉の治世下で五大老の職にあつた。言つなれば五大老時代に家康の独走を阻止出来なかつた人物であり、実力も人望も家康に見抜かれていた。西軍の総大将ではあるが、石田三成に担がれただけのお調子者だと家康は見ている。本来は処刑に相当するのだが、妻は加賀百万石を家康に与えられた前田利家の娘である。そこへ島津義弘に頼まれた腹心の井伊直政らから助命嘆願が出された。交番に自首して警察から同情されたようなもので、取り合えず身柄を拘束され駿河の久能山に幽閉された後、伊豆諸島の八丈島へ流された。本来は単身

赴任で自給自足の生活をしなければならぬのだが、関係者の嘆願で家族や使用人の同伴が許されたらしいから、大物戦犯としては上等の暮しであつたろう。島に五十年居て八十四歳で往生したという。考えようによつては一番幸せだつたのかも。

関が原合戦の軍功で加増された武將は加賀の前田氏を筆頭に百十五人居る。領地其の俣が島津氏など六十九家、大部分は徳川の家臣で家康は外様大名への加増を優先したことが窺われる。そうなると水戸を内示された榊原康政は破格である。家康は庚政が後継者・秀忠を守つてくれたことが余程嬉しかつたのであろう。逆に領地を没収された者は宇喜多秀家以下九〇名、国替え封土削減にあつた大名は毛利、上杉、秋田、そして佐竹の四氏である。秋田に居た秋田氏は古い土着豪族である。関が原合戦には家康に敵対した訳ではないがドサクサに紛れて周辺の小城を攻めたことを山形の最上氏などに密告され、日記を証拠に関が原合戦の前だつたから西軍とは無関係と主張したのだが、慶長七年に佐竹氏が水戸から秋田へ移される際に十九万石から六戸（笠間市）五万石に国替えされた。雪国秋田より温暖な茨城県内五万石のほうが良いようにも思える。

石岡を攻めて大塚氏を滅ぼした佐竹氏は、時勢の変化を敏感に察知して平安時代後期から連綿と常陸国北部に続いてきた豪族であり、豊臣秀吉、徳川家康などはもとより家系を誇る上杉、毛利、島津などよりも遙かに古い歴史を持つ。

言つなれば関が原合戦に関わつた東西両軍武士団の中で最も古い。その辺りの自尊心が「しぶとく生き残つた佐竹」の目を狂わせたのであるうか。府中城攻撃の際は、いち早く秀吉に追従して水戸から土浦辺りまでの領地を獲得したのだが、豊臣時代に石田三成に近づき過ぎて天下の行方を見誤つたようである。

家康を倒したい三成は上杉景勝と結び、景勝はあからさまに城を修築し、糧食を蓄え、武器を買い、浪人を集めるなどのほか反家康運動を地方で活発に扇動していた。佐竹の当主・義宣と父親の義重は三成の意向を汲んで上杉氏と密使のやり取りをしていた。家康が策略で上杉討伐と称して宇都宮方面に出陣してきた際には、四万の兵を日立市近辺に出していた。三成挙兵の知らせで家康が江戸へ引き返したため合戦にはならなかつた。その際に義宣は佐竹氏らしいやり方で軍勢少々を東軍として関が原に出陣させたのだが、狸爺さんの家康は誤魔化されない。結局、水戸など百二十万石から秋田二十一万石余に左遷されたのである。状況が切迫したとき、義宣の父・義重は徳川秀忠を通じて家康に佐竹氏の存続を嘆願したようである。義重の妻は伊達政宗の妹であり、義宣は甥なので、或いは政宗からも嘆願が行われたように思われる。

殺伐な戦国時代でも縁故、交友などの関わりで助からない運命が奇跡的に救われることが関が原の合戦で数多く証明されている。顧みて現在でも、同じ行動をとつたのに助かる政治家と斬られる政治家がある。それを分ける理由は戦

国時代と同様に大将の友人だったとか、次の選挙に役立つとか、助けるほうの都合だけで大義名分は無いようだ。良く言えば義理人情、悪く言えば旧態依然。

石岡の地に滅んだ大塚氏は、中央政界に知り合いがなかったと思うほかない。それどころか、佐竹進攻の急報に接した府中城の重臣たちは「如何にせば好からん」と「評定定まらず」と史書にある。

未成年の大将を補佐する重臣たちがどうしてよいか分からないようでは戦国も今も生き残れない。

近藤治平の「恋の一行に呟いて」

- ・君のこえにゆれてみぎひだり
- ・待ち人の声もなく蟋蟀の鳴く
- ・此花の名は

何だか淫らに女子のかくしどころ

- ・ここはどこ夢の覚めて行き暮れて
- ・声しても応えのみえず

片想いにさみしくひとり夜に呟く

- ・手もふれで何のつたうか行き暮れてひとり
- ・夢にだけ君を抱くのはもうあきた
- ・この手のひらにきみの乳房のあたたかく
- ・夜はしんしん独りきみを想う
- ・あつき口づけに薬師さまほそめて
- ・この口づけに龍が吠えた里村の静かに
- ・寒さに桜花の首をすくめて君の唇の熱き

ことば座「風の塾」(6月開講予定)募集教室のご案内 ふるさとの風を、大切な言葉に表現してみませんか

言葉とは、心を口に茂らせること。心とは真実。口とは真実を表現する全ての手段のこと。ふるさとの心を文章に、そして手話の舞いに、朗読に表現し、一緒に楽しみませんか。脚本家白井啓治(日本シナリオ作家協会会員)と朗読舞女優小林幸枝が講師をつとめる楽しい教室です。

A) ふるさとを手話に楽しむ教室

本教室は、一行詩「ふるさとの風」、常陸の国を詠んだ「万葉集(45首)」を中心に、詩歌を手話の舞いに楽しみながら、自己表現としての手話を学んでいただきます。

B) ふるさとを朗読に楽しむ教室

「朗読は演劇である」と認識している人はどれだけ居られるでしょうか。この朗読教室は、演劇としての朗読...語り朗読/朗読劇...を指導します。茨城訛りに自信を持って自己表現としての朗読語りを楽しみませんか。また、朗読教室では、希望される方には、手話演技を交えた朗読劇の指導も行ないます。

C) ふるさとを文章に楽しむ教室

日常生活の中に、自分の思いや考え、発見などを言葉に紡いで紙に落とすという楽しみを持つ事は、心をとても豊かにしてくれます。紙に落としてみる言葉は、日記であってもエッセイであっても詩であっても、更には物語としてであってもかまいません。文章教室は、心象を一言の言葉にして紙に落とすという一行文に出発し、自由で自在な形式にとらわれない文作を楽しんでいただく教室です。

各教室月2回の開講(1回の授業90分)...(第二、第四土曜日を予定)

受講料:月額3,000円(教材費込み)

各教室の募集人員は、責任指導の可能な10名程度。

5月12、26日、府中公民館小会議室にて14時より体験教室を開きます。詳しくは下記「ことば座」までお問い合わせください。

ことば座 〒315-0013 茨城県石岡市府中5

編集後記

各地で地震が頻発している。小さな地震が頻発している方が、エネルギーが蓄積されないから良いのだというが、世界の各地に大きな地震がきているのを思うと、小さな地震がある方が安全だとは、どうしても思えない。何となく捉えどころのなかったこの春の桜は寂しい花付であった。地震の頻発するの

桜の花の付が良くなかったのも無関係には思えないのだが、果してどうなるのだろうか。

編集事務局

〒315 0001 石岡市府中13979 2
0299 24 2063

(白井啓治方)